

馬の尻のぞき

むかしむかし、脇山に泰兵衛という、力自慢で気さくな若者がおったそうなの。

面倒見のよい泰兵衛は、

大きな石が邪魔だという村人がいれば、すぐさま手伝いに走り、

腰を悪くした年寄りがいると聞くと、水汲を引き受けたりするような若者だったそうなの。

とある秋の日こと。村人がなにやら話しておりました。

「こないだなあ、化かされてから往生したとばい」

「ほんなことい。わしも化かされて、頭にきとるところたい」

そこへひょっこり野良仕事帰りの泰兵衛が通りかかりました。

「どげんかしたとね？」

「いたずらばっかりしよるキツネのこったい。村んもんはみ～んな迷惑しと～とよ」

「キツネ？キツネくらいなんね。よ～し、おれがこらしめちやるけん、まかしときやい」

泰兵衛はキツネを探して歩きまわりました。

「んん～、キツネのやつア、どこに隠れと～とかいな？」

泰兵衛が山の方へどんどん歩いていくと、

大きな木の陰からキツネがひょっこり現れました。

「でたばい...キツネ。みときやい、いっちょう、化けの皮ば、はがしちやるけん」

泰兵衛は息を殺して、様子をつかがいました。キツネは泰兵衛にまったく気がつかず、日向ぼっこをしています。

のどかに晴れた秋空の下、背振山が赤や黄色に色づいています。

「どげんしたらよかろうか...よし！投げ飛ばして、ふんづかまえて...」

泰兵衛が飛び出そうとした矢先、キツネはふいに起き上がって、あたりをきょろきょろ見渡しました。

まだまだ泰兵衛には気づいていないようです。

泰兵衛は、岩陰に隠れました。

「な～んば、しょうとかいな？」

キツネは、河原の方へと歩いて行きました。そしてきれいな水の流れに入り、顔を洗い、川苔を頭にのせた途端...

なんとキツネは、美しい娘に変わりました。

「たまがった～。あげな別品さんがキツネっちゃ、誰も信じんばい。

おれだつてな～んも知らんで、お(会)うとつたら、化かされるとこやった...」

キツネは、おしとやかに歩きだしました。泰兵衛は、気づかれないようにキツネの後を追いかけてました。

「な～んば、たくらんど～とかいな...？」

キツネは村はずれの屋敷の中に入っていました。

その家ではどうやら、祝言の宴(うたげ)の真最中のようでした。楽しそうな宴の賑やか

な声が聞こえてきます。

キツネの様子が知りたいのですが、

屋敷の、すべての障子も戸口もぴしゃりと閉められているので、中の様子がちっともわかりません。

「キツネのやつア、どげんしとるとかいな？」

しかたんなかね。こげんして、指につばばつけて、穴を開けてと…」

泰兵衛が屋敷の中をのぞこうと、つばをつけた指を障子に突っ込んだその瞬間、

「馬の尻ん穴に、指を突っ込んだるったい！」

どこからか大声がしたかと思うと、泰兵衛は馬に蹴飛ばされてでんぐり返りました。

あまりに突然なことに、泰兵衛はあっけにとられてしまいました。

ふと、辺りを見回すと、屋敷も何にもありません。

笑いながら走り去るキツネの音が、澄み切った秋空に響いていただけ、だったとさ。